

「話すこと・聞くこと」の特性を踏まえた授業の要件 —第4学年「調べて分かったことを話そう」についての考察—

中野嘉宣*・上谷順三郎**

(2025年11月12日 受理)

Requirements for Lessons Based on the Characteristics of ‘Speaking and Listening’: Considerations of Fourth Grade ‘Let’s Talk About What We Found Out’

NAKANO Yoshinori, KAMITANI Junsaburo

要約

学習者主体の授業を目指して、鹿児島県でも各教科等の授業において各学校や教室で授業改善に取り組んでいる。特に、学習者である子ども自身に自己選択・自己決定することを大切にした授業実践が叫ばれている。一方で、切実感や必要感をもつことなく、ただ単に学習活動に取り組んでいる姿が見られることがある。その要因として、国語科の目標や単元の学習のねらい、教材の特性などを明確にしないまま、子どもに活動に取り組みせていたという点に課題があったためだと考える。

子どもが「自分の思いや考えを相手に伝えたい。」という切実感をもつことや、学んだことが単元や日常の言語活動において発揮されることで、「～ができるようになった」、「～の力が身に付いた」という達成感や上達感を実感する姿につながると考える。そのため、「話すこと・聞くこと」領域の特性を踏まえた上で、「発想」と「話し言葉（音声化）」の指導の手立ての具体化が重要である。

本実践報告では、上記の課題解決に向けて、「話すこと・聞くこと」領域における第4学年「調べて分かったことを話そう」の単元について、学習者主体の授業を構築し、授業実践を基に分析・考察し、報告するものである。

キーワード：話すこと・聞くこと、単元内自由進度学習、ICT機器の活用、遠隔授業

* 鹿児島大学 教育学部附属小学校 教諭

** 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 教授

1. はじめに

今日は将来の予測が困難な時代であり、変動性、不確実性、複雑性、曖昧性の特徴から「VUCA」の時代と言われている。さらに、「Society5.0」の社会の中では、膨大なビックデータを人間の能力を超えた AI が解析することで、これまでにできなかった新たな価値が産業や社会にもたらされると予想される。総合科学技術・イノベーション会議（2022）では、2017年の学習指導要領改定による資質・能力重視の教育課程への転換を踏まえ、教師による一斉授業（一定のレベルを想定した質の高い授業展開）から子ども主体の学び（子どもの理解度や認知の特性に応じて自分のペースで学ぶ）への転換が求められている。そして、多様な子どもたちに対して、ICTも活用し、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させる必要性を示している。

本校の国語科では、2024年度から「自分のことばを磨き続ける国語科授業の創造」という研究主題の下、目指す子どもの姿とその姿に迫るために必要な資質・能力を明らかにした。そして、自分のことばを磨き続ける学習内容の設定の手順や、「話すこと・聞くこと」領域と「書くこと」領域における見方・考え方をそれぞれ整理し、指導方法の具体化を図った。

しかし、実際の子どもの姿として、学習課題や学習形態などを直感で選んだり、タブレットを用いて教師が用意した学習支援アプリに終始向き合ったりするなど、自ら選択・決定したことに対して本当の意味で切実感や必要感をもつことなく、ただ単に学習活動に取り組んでいる姿が見られることがある。その要因として、授業を構想する教師自身が形式的・画一的に学習者主体の授業を捉え、授業改善のアプローチが方法面に比重を置きすぎているためであると考えられる。これは自らの反省として、国語科の目標や単元の学習のねらい、教材の特性などを明確にしないまま、子どもに活動に取り組みせていたという点に課題があったと言える。

そこで、本実践では、第4学年国語科「話すこと・聞くこと」領域の単元における授業実践を通して、「話すこと・聞くこと」領域の特性を踏まえた上で子どもに確かな言葉の力を付けるとともに、学習者主体の国語科の授業の要件について探ることとした。

2. 「話すこと・聞くこと」の特性

井上（2008）は、「話すこと・聞くこと」領域で扱う話し言葉の最も重要な特性として、その場で伝え合い、そして消えていくという「即時性」を挙げている¹⁾。つまり、その場その場のやり取りを一挙に認知・認識しながら、話したり聞いたりする能力が必要となる。

さらに、学習指導要領解説や文献¹⁾を参考にしながら、本校国語科では、「話すこと・聞くこと」の特性について、表1のように三つに整理することにした（鹿児島大学教育学部附属小学校国語科、2025）。

¹⁾ 倉澤栄吉・野地潤家監修（2004年）『朝倉国語教育講座 3 話し言葉の教育』朝倉書店
野地潤家編集・解説（1994年）『国語教育基本論文集成 10 音声言語教育論話し方・聞き方教育論』明治図書出版
神田恵美子（2020年）『すべての学びは「聞くこと」から』早稲田大学出版

【表1】 「話すこと・聞くこと」の特性

時間的線条性	音声を媒介・手段とする言語行動であり、話し手が伝える順に、聞き手の頭の中に時間軸に沿って入っていく特性
表現の一回的発現性	発せられた途端に消えていき、時間とともに流れて留まることがないという特性
対人的直接性	話し手の顔つきや身ぶり等の身体的変化がことばと同時に聞き手に向かって働いたり、話し手と聞き手の関係性によってことばが変化していったりする特性

これらの特性を踏まえた上で、「話すこと・聞くこと」領域に関わる子どもに付けたい言葉の力を明確にし、学習内容を重点化したり構造化したりしながら設定し、学習指導を工夫することが重要である。また、「話すこと・聞くこと」領域は、「話すこと（独話）」、「聞くこと（聞く）」、「話し合うこと（対話）」の三つの内容と表現様式で構成されている。各学年では、年間指導計画に基づき、一つの単元において、それらの一つの内容と表現様式を重点化し、話す力や聞く力、話し合う力を育てていくことが求められる。

3. 国語科「話すこと・聞くこと」領域で大切にしたい学習指導

「話すこと・聞くこと」領域における学習指導の課題は次のとおりである（鹿児島大学教育学部附属小学校国語科，2025）。

【年間指導計画】

- ・ 「話し合うこと・聞くこと」領域は、「聞くこと」、「話し合うこと」、「話すこと」の単元を各1回ずつ、計3回設定している。また、「話すこと・聞くこと」領域の小単元を2回設定しているが、他領域と比べて機会や割り当てられる時数が少ない。
- ・ 「話すこと・聞くこと」領域は、人間関係づくりや学級風土づくりなど、話したり聞いたりする土台が大切であり、年間で計画的に資質・能力を育成していく必要がある。

【学習内容】

- ・ 話し言葉の構成要素が「内容」、「音声」、「非言語」、「反応」など、多岐にわたる内容を指導する必要があるが、学年の発達の段階及び系統性を明確にした学習内容の設定が難しい。

【指導方法】

- ・ 切実感ある話題設定（相手・目的・方法など）や達成感・上達感を味わう実の場の設定が大切である。
- ・ 「スピーチ作り」という書き言葉の指導に重点を置く傾向があり、話し言葉（音声化）の指導が簡素化しやすい。
- ・ 「一瞬で消える」という「話すこと・聞くこと」領域の特性があり、自他の話し方や聞き方、話し合い方を評価したり、自覚したりすることが難しい。
- ・ 話し言葉と書き言葉の両面を踏まえた教材開発が重要であり、教材作成の時間を割く必要がある。

これらの課題は、「話すこと・聞くこと」領域の特性である「即時性」と関わりがあると考えられる。

そこで、本領域の課題を解決するために、「話すこと・聞くこと」領域の特性を踏まえて、「発想」と「話し言葉（音声化）」の二つの指導の手立てを具体化した。

3.1. 「発想」の指導の手立て

「発想」の指導の手立てとして、「他教科等、学校行事との関連」、「モデルの提示」を行った。単元の学習を構想する際、次のような発想に関わる五つの意識を検討した。

- ① 話題意識「何を話すのか、何を聞くのか、何を話し合うのか」
- ② 目的意識「何のために話すのか、何のために聞くのか、何のために話し合うのか」
- ③ 相手意識「誰に話すのか、誰から聞くのか、誰と話し合うのか」
- ④ 場の意識「どのような場面か」
- ⑤ 方法意識「どの方法を用いるか」)

子ども主体の学びをつくるためには、発想に関わる五つの意識を働かせ、子ども自らが「話したい」、「聞きたい」、「話し合いたい」といった話題や実の場を設定することが重要である。そのために、子どもが切実感や必要感をもつことができるような話題や実の場を設定する必要がある。

3.1.1. 他教科等、学校行事との関連

話題や実の場を設定する際、単元の学習で育成する資質・能力や学習内容を踏まえ、「他教科等や学校行事との関連」を図ることを大切にしたい。そうすることで、他教科等の学習に関する話題でスピーチをしたり、学校行事に向かって話し合いをしたりするなど、子どもたちが相手意識や目的意識などの発想に関わる五つの意識をより働かせ、日常生活との関わりの中で単元の言語活動を展開することが期待できると考える。

3.1.2. モデルの提示

単元の導入段階において、子どもが話題意識や相手意識、目的意識、場の意識、方法意識などの発想に関わる五つの意識を働かせながら、単元のゴールを明確にもち、そのゴールに向かってどんな力を身に付ける必要があるか、どのような活動を行うのかなど、単元の学習に見通しをもつことができるようにすることが重要である。

その手立てとして、本単元で育成する資質・能力や子どもたちに学ばせたい形式的価値を明らかにした「モデルの提示」を教師が行った。提示の仕方としては、単元の最終ゴールとして子どもたちに求めるモデルを提示する場合や、自分の言語活動の課題に気付くことができるために敢えて不十分なモデルを提示する場合とがある。また、ねらいに応じて、書き言葉（原稿や記録）のモデルか、話し言葉（録音や録画）のモデルか、両方のモデルかを検討し、提示する場合がある。そうすることで、教師自身が単元の目標と内容を明確にすることができるとともに、それらを子どもと共有することが可能となり、どのような形態や学習用具を用いるのかなど、子どもが自ら学習方法を選択・決定し、調整する姿にもつながると考える。また、モデルと子どもの話し方や聞き方、話し合い方などの表現との比較により、具体的な評価もできると考える。

3.2. 「話し言葉（音声化）」の指導の手立て

「話し言葉（音声化）」の指導の手立て²として、「多様な練習の場の設定」、「ICT機器の活用」を行った。「話すこと・聞くこと」は、スピーチ原稿を作成する段階と、実際に音声化し発表する段階の二つに分かれる。特に、音声化の段階は実技性が強いので、「子ども自らの音声化における課題（声の大きさ、速さ、間の取り方など）に応じた練習の場」、「自分の音声化の状況を可視化し、自覚する場」の二つの場の設定が重要である⁽²⁾。

その手立てとして、音声化の場を設定する際、声の大きさや速さ、間の取り方などを意識したり、自分自身の話し方や聞き方、話し合い方を自覚したりすることができるように、「多様な練習の場の設定」、「ICT機器の活用」に努めた。実際に、メトロノームを用いて自分の話す速さや間の取り方を見つめる場や、鏡台に向かって自分の話し方をモニタリングする場、空き教室でタブレットを用いてスピーチを録画し話し方を評価する場など、子どもの課題に応じて多様な練習の場を設定することで、子ども一人一人の音声化における技能の向上につながるとともに、目線や身振り・手振りなどの非言語的な要素も意識できるようになると考える。

最後に、「発想」と「話し言葉（音声化）」の指導の手立てを具体化したことで、子どもが「自分の思いや考えを相手に伝えたい。」という切実感をもつことや、学んだことが単元や日常の言語活動において発揮されることで、「～ができるようになった」、「～の力が身に付いた」という達成感や上達感を実感することができ、言葉の力の高まりを子ども自身が自覚化することにつながったと考える。

4. 国語科学習指導の実際³

4.1. 単元名

第4学年「調べて分かったことを話そう（教材『調べて話そう、生活調査隊』光村図書4年下）」

4.2. 単元の実施要項

4.2.1. 対象

鹿児島大学教育学部附属小学校 第4学年 34人

4.2.2. 期間

令和7年1月31日（金）から令和7年2月27日（木）

4.2.3. 時間数

国語科時数8時間、社会科2時間 計10時間

4.3. 単元のねらい

本単元では、話し方の工夫等の「話すこと」の視点に着目し、調べたことを報告する活動を通して、

² 井上一郎（2008年）『話す力・聞く力の基礎・基本を育てる—小学校—上巻』明治図書 第2学年「相手に声を届けよう」星原貴光の実践を参考に「声を届ける」ために必要な三つの能力に基づいて指導の手立てを工夫した。

³ 2024年度鹿児島大学教育学部附属小学校公開研究会（2月）の公開授業をまとめた実践である。

相手を見て話したり聞いたりするとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話すことについての理解を深めようとするものである。また、話の中心や話す場面を意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫しながら話す能力や、相手や目的を意識しながら、調べたことを分かりやすく報告しようとする態度を身に付けることができるようにしたいと考え、本単元「調べて分かったことを話そう」(教材「調べて話そう, 生活調査隊」光村図書4年下)を設定することにした。

4.4. 子どもの実態

本学級の子どもたちの実態は、次のとおりである。実態の収集方法として、評価テストやスピーチの観察を行った。

- ① 多くの子どもが視線や言葉の抑揚、強弱、間の取り方などの話し方について知識がある。しかし、話し方を活用することについては、視線を意識したり、抑揚や間を取って話したりすることができない子どももいる。これは、これまでの学習の中で、話し方についての理解を深める一方で、それを活用して話す経験が少なかったからだと考える。
- ② 鹿児島市のよさや魅力について伝えたいことは、「地形(桜島, 温泉など)」や「特産品(薩摩切子, 黒豚, 薩摩芋など)」が多く、全ての子どもが話題を検討することができている。一方で、必要な事柄の選択については、集めたことが話す目的に合っているかを意識しながら選ぶことができない子どももいる。これは、目的を意識して、集めた材料を比べたり、分類したりして話す内容を検討することができていないからだと考える。
- ③ 半数の子どもが話し方の工夫や分かりやすく話すときの大切なことについては、言葉の強弱を意識できている一方で、抑揚や間の取り方を工夫したり、話の中心や話す場面を意識したりできていない子どももいる。これは、話の中心や話す場面に着目し相手や目的、場面を意識して、話し方を考えたり、実際に話したりする経験が少ないからだと考える。
- ④ スピーチの経験については、多くの子どもが話したり聞いたりした経験がある一方で、スピーチの意欲としてあまりやりたくないと思っている子どももいることが分かった。これは、話すことに対して苦手意識があったり、相手の反応を十分に捉えることができていなかったりするからだと考える。

4.5. 単元の目標

- (1) 相手や目的を意識しながら、相手を見て話したり聞いたりするとともに、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などに注意して話すことについて理解することができる。(知識及び技能(1)イ)
- (2) 話の中心や話す場面を意識して、言葉の抑揚や強弱、間の取り方などを工夫しながら話すことができる。(思考力, 判断力, 表現力等A(1)ウ)
- (3) 他校の4年生に鹿児島市のよさや魅力を分かりやすく報告するために、学習の見通しをもって粘り強く課題解決に取り組んだり、話し方を工夫して話したりしようとするすることができる。(学びに向かう力, 人間性等)

4.6. 単元の指導計画（全8時間）

過程	自分のことばを磨き続ける姿	学習課題・学習内容の構造・主な学習活動	教師の具体的な働きかけ						
つかむ・みとおす①	<p>他校の4年生にスピーチをして、互いの市のよさや魅力を知り、鹿児島県について理解を深めていきたいな。</p>	<p>0・1 教材との出会い、課題解決の見通し (1) 教材との出会い【社会科との関連】 ・ 話題への目的喚起 (2) 題材の設定、課題解決の見通し ・ 単元の学習課題の設定 ・ スピーチの話題の選択・決定、作成するグループの決定 ・ 学習計画の立案</p>	<p>○ 本単元の学習活動に対する切実感をもつことができるようにするために、社会科「私たちの県の様子」の学習と関連させ、他校の4年生からのメッセージ動画を視聴する。また、言語活動への課題意識をもつことができるようにするために、自分のスピーチとモデルスピーチを比較する活動を設定する。</p>						
しらべる・ふかめる⑥	<p>相手に分かりやすい報告スピーチをするために、大切なことは何だろう。</p> <p>相手にとって分かりやすいスピーチは、相手や目的、場面を意識しながら、内容や話し方を工夫したらよさそうだね。</p> <p>相手や目的等意識して、スピーチ原稿と話し方を結び付けながら工夫できると、更に分かりやすい発表になるぞ。</p>	<p>他校の4年生に分かりやすいスピーチをするためには、何をどのように話せばよいだろうか。</p> <p>2 スピーチのポイントの確認 「相手に分かりやすいスピーチをするために大切なことは何だろうか。」</p> <table border="1" data-bbox="502 840 1037 1019"> <tr> <td data-bbox="502 840 790 929"> <内容> ・ スピーチの組立て ・ アンケートの活用 </td> <td data-bbox="790 840 1037 929"> <話し方> ・ 言葉の抑揚や強弱 ・ 間の取り方 ・ 資料の活用 </td> </tr> <tr> <td colspan="2" data-bbox="502 929 1037 974"> 相手や目的、場を意識 </td> </tr> <tr> <td colspan="2" data-bbox="502 974 1037 1019"> 相手や目的、場を意識した内容、話し方【話し方の工夫】 </td> </tr> </table>	<内容> ・ スピーチの組立て ・ アンケートの活用	<話し方> ・ 言葉の抑揚や強弱 ・ 間の取り方 ・ 資料の活用	相手や目的、場を意識		相手や目的、場を意識した内容、話し方【話し方の工夫】		<p>○ 報告スピーチに関する相手や目的、場面などの発想に関わる意識を高め、学習の見通しをもつことができるようにするために、「他校の4年生に、どのようなスピーチができるよいか。」と問う。</p> <p>○ 話し方の工夫等の「話すこと」の視点に着目し相手や目的、場面を意識して、スピーチの内容を検討したり、話し方の工夫を考えたりすることができるようにするために、スピーチ原稿と話し方とを関係付けながらスピーチのポイントを捉えられるようにする。</p>
<内容> ・ スピーチの組立て ・ アンケートの活用	<話し方> ・ 言葉の抑揚や強弱 ・ 間の取り方 ・ 資料の活用								
相手や目的、場を意識									
相手や目的、場を意識した内容、話し方【話し方の工夫】									
しらべる・ふかめる⑥	<p>友達と協力したことで、よりよいスピーチが完成できたぞ。他校の友達に伝えるのが楽しみだな。</p>	<p>3 スピーチメモの作成、情報の収集 ・ スピーチメモの作成（内容の検討） ・ 取材、アンケート調査の作成等</p> <p>4 スピーチ原稿の下書き ・ スピーチ原稿の下書き、ト書き等の記入 ・ グループ内の推敲</p> <p>5・6 資料の作成、音声化、リハーサル ・ 必要に応じてグラフや表等の資料の作成 ・ 音声化の練習の場の選択・決定 ・ 附属小複式Ⅱ組とリハーサルの実施</p> <p>7 試行の見直し、課題別の練習（本時） 「自分たちのスピーチは、相手にとって分かりやすいだろうか。」 ・ リハーサルの振り返り、課題に応じた練習</p>	<p>○ グループの課題に応じて学習を進められるようにするために、練習の場を選択したり、スピーチ原稿と音声化を往還したりすることができるようにする。</p> <p>○ 報告スピーチの達成感や上達感を実感できるようにするために、完成したスピーチを他校の4年生と交流する実の場を設定する。</p>						
ふりかえる・いかす①	<p>他校の友達の参考になってよかったな。学んだことを他の教科の学習や生活に生かしたいな。</p>	<p>実の場（社会科の学習） 完成したスピーチを他校の4年生と交流する。</p> <p>8 発表の様子の共有、活用場面の想起 「学んだことをどのように生かせるかな。」 ・ 発表の様子の共有、相互評価 ・ 自己評価（内容、話し方の工夫）</p> <p>他校の4年生に分かりやすいスピーチをするためには、相手や目的、場面を意識して、調べたことを整理し、大事なことが伝わるように言葉の抑揚や強弱、間の取り方を工夫するとよい。</p>	<p>○ 今後の話すことの学習へとつなげるために、本単元で見いだしたり、全体で共有したりした「話すこと」の視点や思考方法について振り返る活動を設定する。その際、日常生活や他教科等の活用できそうな場面を話し合うようにする。</p>						

※ 第3時から第7時においては、グループの課題や状況に応じた単元内自由進度学習を設定した。

4.7. 本単元における教師の手立て

本単元の指導に当たっては、自分の思いや考えを相手に伝えたいという切実感をもち、伝える内容や話し方などを考えながら、相手に分かりやすい報告スピーチができるように、学習内容の設定や指導方法を次のように工夫することが大切であると考えます。

4.7.1. 第一次における主な手立て

本単元の学習活動に対する切実感をもちことができるようにするために、まず、社会科の学習を振り返った後、他校の4年生からのメッセージ動画を視聴し、鹿児島市のよさや魅力を調べ、他校の4年生にオンラインの場で報告するという相手や目的、場面などの発想に関わる意識を明確にする。次に、これまでの自分のスピーチとモデルスピーチを比較する。そして、「聞き手に分かりやすいスピーチをするためには、何をどのように話せばよいだろうか。」というスピーチの内容と話し方の工夫に関わる学習課題を設定する。

4.7.2. 第二次における主な手立て

スピーチの内容の検討の大切さや話し方の工夫について考えることができるようにするために、話し方の工夫等の「話すこと」の視点に着目し相手や目的、場面などを意識しながら、グループでアンケート調査の内容を検討したり、グループや個人の課題に応じてスピーチの練習の場を選択・決定したりする。

4.7.3. 第三次における主な手立て

学習に対する達成感や上達感を実感できるようにするために、他校の4年生とオンラインの場で互いの市のよさや魅力を交流する実の場を設定する。さらに、単元の学習を振り返り、話し方の工夫等の「話すこと」の視点と相手や目的、場面などの発想の意識の有用性を自覚できるようにする。

5. 本実践の実際

5.1. 第一次（第0時から第1時）における本実践の実際

単元の導入において、本単元の学習活動に対する切実感をもちことができるようにするために、社会科「私たちの県の様子」の学習と関連を図り、自分が住んでいる市の魅力やよさを想起する活動を設定した。4年生の社会科の学習において、鹿児島県は薩摩半島、大隅半島と、様々な島から構成されている地理的環境の様子について既に学習していることもあり、特産品や産業などの特色を想起することができた。

第1時において、発想に関する五つの意識を喚起できるようにするために、他校（鹿屋市の小学校、龍郷町の小学校の二校）の4年生からのメッセージ動画を視聴した。動画を視聴することで、特に相手意識と目的意識、話題意識の三つの意識を明確にする姿が見られた。また、オンラインで発表するという場について具体的に考えさせることで、「聞こえが悪い」、「止まることがある」などの環境面について配慮する必要性を見いだすことができた。

そして、スピーチの言語活動に対する課題意識をもちことができるようにするために、現在の自

分のスピーチとモデルスピーチを比較する活動を設定した。声の大きさや速さ、間の取り方などの話し方だけでなく、目線や身振り・手振りなどの非言語的な要素にも気付き、自分自身のスピーチの課題を明確にしようとする姿が見られた。



【写真1】 第1時の板書

それらを基に、写真1のように、単元のゴールと単元のめあてを子どもと共有し、学習計画を協議した。その際、第2時については、スピーチのポイントを一斉で見付けること、第3時から第7時においては、グループや個人のスピーチの課題やスピーチ作成の状況などに応じて、スピーチの練習の場を選択・決定することといった単元の展開を確認した。これまでの学習経験を想起し、子ども自らリハーサルを設定する必要性についての意見が出たため、第6時で同学年の近隣の学級とスピーチのリハーサルを行うことを確認し、学習計画に位置付けることにした。

5.2. 第二次（第2時から第7時）における本実践の実際

第2時では、スピーチのポイントを捉えることができるようにするために、教科書教材のモデルスピーチ動画を分析する活動を設定した。その際、動画だけではなく、スピーチの原稿（紙媒体）のワークシートを配付することで、スピーチの内容と音声化の両面のポイントを見付けられるようにした。また、図1のように、ICTを活用し、板書の写真の下に「内容」、「話し方の工夫」、「場面意識」の三観点でそれぞれのポイントを整理しログ化することで、第3時以降のスピーチの練習の場において、第2時で見いだしたス

【スピーチのこつ（第2時）】

内容	話し方の工夫	場面意識
<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> はじめは、話題やテーマを伝える <input type="checkbox"/> 中は、理由を書く <input type="checkbox"/> おわりは、提案や問いかけで伝える <input type="checkbox"/> 根きよとして、アンケートやインタビュー結果など事実を入れるとよい 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 間の取り方 <input type="checkbox"/> 話の強弱 <input type="checkbox"/> 話のよくよう <input type="checkbox"/> 声の工夫（大きさ、速さ） 	<ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> オンラインの場をふまえた音声や資料のかくにん <input type="checkbox"/> 目線 <input type="checkbox"/> し料の出し方、しめし方

【図1】 第2時で見いだしたスピーチのポイントのログ化

スピーチのポイントを意識し、随時振り返って活用できるようにした。

第3時から第7時において、グループや個人のスピーチの課題やスピーチ作成の進捗状況などに応じて、スピーチの練習の場を選択・決定できるようにするために、単元内自由進度学習を設定した。その際、学習内容や学習活動、学習方法（道具）などの選択・決定を全て子どもに委ねるのではなく、「話すこと・聞くこと」の特性を踏まえた上で、「スピーチ原稿の作成」、「音声化」の二つの段階を考慮できるように、図2のような「学習の手引き」を作成し、活用できるようにした。そうすることで、子どもがスピーチの言語活動に対して見通しをもち、学習課題の解決に向けて学習活動や学習方法などを選択・決定する姿や、グループや個人の課題に応じてスピーチの練習の場を選択・決定する姿が見られた。また、教師としては、スピーチ作成の過程を明確にし、学習過程を見通すことにつながり、各過程に応じた指導の手立てをより具体化することができた。さらに、子ども一人一人の学習の手引きを適宜確認することで、子どもの学びの状況を把握することができ、既習事項を想起させるものを提示したり、どの練習の場がよいか選択肢を提示したりするなど、個別指導に生かすことができた。

	学習すること	使うもの・場	した日	先生
1	何を伝えるのかを決める	<input type="checkbox"/> ノート <input type="checkbox"/> タブレット	/	
2	スピーチメモをつくる	<input type="checkbox"/> ワークシート <input type="checkbox"/> タブレット	/	
3	グループで、だれが、どの組立てのところがたん当するか話し合う	<input type="checkbox"/> ワークシート <input type="checkbox"/> タブレット <input type="checkbox"/> スピーチの組立てにたん当の名前を書く	/	
4	アンケートをつくる	<input type="checkbox"/> タブレット <input type="checkbox"/> 二次元コード	/	
5	スピーチ原稿をまとめる	<input type="checkbox"/> ワークシート <input type="checkbox"/> タブレット	/	
6	スピーチ原稿にト書きをする	<input type="checkbox"/> ワークシート <input type="checkbox"/> 用紙	/	
7	スピーチの練習をする	<input type="checkbox"/> スピーチの場 <input type="checkbox"/> 録画の場 <input type="checkbox"/> みがき合う場 <input type="checkbox"/> ためしの場	/	
8	Zoom についてグループでシミュレーションする	<input type="checkbox"/> クラスルームの Zoom の URL に入室し、プレイクアートルームに入る	/	
9	複式II組、ろ組とリハーサルをする	※ 録画	2/13 1 校時	
10	リハーサルのスピーチをふり返る	<input type="checkbox"/> リハーサルの動画をたしかめ、ふり返る	/	
11	リハーサルのグループの課題をグループで話し合う	<input type="checkbox"/> それぞれのふり返りを発表し、話し合う	/	
12	グループの課題において、スピーチの練習をする	<input type="checkbox"/> スピーチの場 <input type="checkbox"/> 録画の場 <input type="checkbox"/> みがき合う場 <input type="checkbox"/> ためしの場	/	
13	輝北小学校、龍郷小学校の4年生とスピーチを交流する	※ 録画	/	

【図2】 「話すこと・聞くこと」の特性を踏まえた学習の手引き

そして、前述したとおり、「話すこと・聞くこと」領域における学習指導の課題に挙げた『「スピーチ作り」という書き言葉の指導に重点を置く傾向があり、話し言葉（音声化）の指導が簡素化しやすい。』という点を改善するために、ねらいや目的に応じて、スピーチの練習の場の多様化を行った（写真2）。具体的には、「スピーチの場（声の速さや間の取り方、目線など）」、「録画の場（ICTの活用）」、「磨き合



【写真2】 多様なスピーチの練習の場

う場（モニタリング）」、「試しの場」の大きく四つの場を設定し、グループや個人の課題に応じて、スピーチの練習の場を選択・決定できるようにした。毎時間、1単位時間の終末に振り返りを行い、4段階でスピーチの満足度を数値化し、次時の導入に生かすことで、話し方の技能の高まりを自覚し、話し言葉（音声化）に関する上達感を実感する手立てにもつながった（写真3）。なお、「スピーチ原稿の作成」の段階から「音声化」の段階の流れは一方向のものではなく、「音声化」を通してスピーチ原稿の内容面についての課題に気付くこともある。つまり、「スピーチ原稿の作成」と「音声化」は、絶えず往還する関係であることには留意しておく必要がある。



【写真3】 第7時の板書

5.3. 第三次（第8時）における本実践の実際

報告スピーチの達成感や上達感を実感できるようにするために、完成したスピーチを他校の4年生と交流する実の場を設定した。事前に教師間で遠隔授業をつなぐICT機器の接続状況を確認しておいたことで、各学校・各グループにおいて、これまでの本単元の学習を生かし、自信をもって報告スピーチに取り組む姿が見られた（写真4）。



【写真4】 他校と交流する実の場

第8時では、単元の学習を振り返り、言葉の力の高まりを自覚することができるようにするために、実の場のスピーチの実際を共有したり、単元初めと終わりを比較したりする活動を設定した。そうすることで、相手や目的、場面を意識して、調べたことを整理することの大切さや、大事なことが伝わるように言葉の抑揚や強弱、問の取り方を工夫することの重要さに気付くことができた。

6. 本実践の総括

6.1. 成果

単元終末の子どもの振り返りの記述から、音声化の技能の高まりを自覚するとともに、他校の4年生に鹿児島市の魅力やよさを伝えることができた達成感を十分に実感していることが分かった。

これは、本単元において、「話すこと・聞くこと」領域の特性を踏まえて、「発想」と「話し言葉（音声化）」の二つの指導の手立てを工夫することができた一定の成果であると考え。また、話すことの過程を踏まえて、グループや個人の課題、進捗状況に応じて練習の場を選択・決定できるように「学習の手引き」を作成・活用したり、多様な練習の場を設定したりすることができたからだ考える。

6.2. 課題

課題として「話題の設定、情報の収集、内容の検討」に関する学習過程の一層の充実が挙げられる。「よりよく話したい。」という意欲を高めるためには、相手意識や目的意識を明確にするだけではなく、自ら話したい話題を決め、話す材料を集めたり、伝える内容を検討したりする過程が肝要である。しかし、各学習過程の重点化を図らなければ、カリキュラムオーバーロードにつながり、持続可能な実践ではなくなる。今後、年間指導計画に設定されている時数内で「話題の設定、情報の収集、内容の検討」に関する学習過程をどのように充実すればよいかについて研究を行っていく。

7. おわりに

「話すこと・聞くこと」領域の特性を踏まえた上で子どもに言葉の力を付けること、学習者主体の国語科の授業の要件について探ることの2点を目指して本実践に取り組んできた。本年度は、第5学年の「話すこと・聞くこと」領域の実践において、本領域の特性を踏まえ、本領域で育みたい資質・能力や学習内容などを明確にしなが、目標と内容、方法の三つのまとまりで研究と実践を深めている。今後も子どもと共に学習者主体の国語科授業実践に挑んでいきたい。

[付記]

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校令和6年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき、実践を行い、その研究成果をまとめたものである。

[引用文献]

- (1) 井上一郎『話す力・聞く力の基礎・基本』P13 (明治図書, 2008年)
- (2) 井上一郎『話す力・聞く力の基礎・基本を育てる—小学校—上巻』P22, 23 (明治図書, 2008年)

[参考文献]

- ・ 神田恵美子著『すべての学びは「聞くこと」から』(早稲田大学出版, 2020年)
- ・ 倉澤栄吉・野地潤家監修『朝倉国語教育講座 3 話し言葉の教育』(朝倉書店, 2004年)
- ・ 野地潤家編集・解説『国語教育基本論文集成 10 音声言語教育論話し方・聞き方教育論』(明治図書, 1994年)
- ・ 廣口知世・山元悦子『トピック学習で話し合う力を育てる 子どもたちとつくり上げた6年間の軌跡』(新評論, 2024年)
- ・ 鹿児島大学教育学部附属小学校国語科, 山口奏良, 繁山大樹, 中野嘉宣, 上谷順三郎「自分のことばを磨き続ける国語科授業の創造Ⅱ～『話すこと・聞くこと』領域における学習内容の設定と指導方法の具体化～」(2025年2月)